研究余滴

佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実

――台南酔仙閣と台北音楽会のこと――

河野龍也

はじめに

二〇一三（平成二五）年九月、台北で『台湾日日新報』の網羅的な閲読を主とする文献調査の機会を得た。その結果、一九二〇（大正九）年の佐藤春夫の台湾旅行について、幾つかの新発見があった。

台湾旅行中、春夫は打狗（タカオ）（高雄）の歯科医・東熙市（ひがしきいち）宅に約二ヶ月半（七月初旬～九月中旬）、台北の民族学者・森丑之助宅に約二週間（十月中旬まで）滞在した。打狗から台北に至る台湾島縦断の旅は、日月潭・霧社・台中を経由する大旅行で、移動中の消息については春夫の諸作が語ってくれる。しかし、打狗と台北での生活については依然不明な点が多かった。今回はその打狗滞在中の台南訪問と、台北での行動について、新たな情報を手にすることができた。以下この二点の調査結果について紹介する。

台南「酔仙閣」開店の経緯

――「酔仙楼」支店の独立

「女誡扇綺譚」（『女性』一九二五・五）のなかで、合理主義を自負する日本人（内地人）の〈私〉が、幽霊屋敷から逃げ出したあと、台湾詩人・世外民の〈迷信〉を笑って口論になりかかる場面がある。幽霊屋敷のモデルについてはすでに論じた(一)。もう一つの舞台「酔仙閣」が春夫来南時に実在したのか、ということが稿者には長い間の懸案であった。

戦前の台南には、現に「酔仙閣」を名乗る台湾料理の名店があった。台南州庁舎（現台湾文学館）の玄関前から西に延びる末広町（現中正路）の二丁目は、一九三二（昭和七）年、沿道がタイル貼りの三層楼に統一され、「台南銀座」と呼ばれる盛観を呈していた。銀座通の東端（市内側）角地、白金町（現忠義路）交叉点には、台南唯一のエレベーターを持つ五層楼の「ハヤシ百貨店」があり、建物は戦時中の空爆を受けながら今もモダン台南を偲ばせるランドマークとして残っている。一方、西門町（現西門路）に接する西端角地には、これとペアになる類似デザインの四層楼があり、紅灯を点じたその窓からは夜ごとに絃歌の声が流れ出した。これが高大水経営、絶頂期の爛熟を迎えた「酔仙楼」の西門町店舗である。真杉静枝は四一（昭和一六）年春にここを訪れ、官能的な旗袍に身を包んだ芸妓（ゲイシャ）（歌妓）たちの美声に酔いしれたという(一)。

問題は、この著名な「酔仙閣」が、「女誡扇綺譚」の「酔仙閣」と結びつくのかということである。「台南銀座」の成立前、この「酔仙閣」ははじめ永楽町三丁目一二番地に店舗を構えていた。一九二二（大正一一）年元旦の『台南新報』年賀広告によれば、経営者は高得、二百名以上の宴会が可能だったと言うから、かなり大規模な店舗である。さらに翌年の年賀広告では、経営者が高金溪に変更され、三七二番の電話番号も記載されている。ところがこの永楽町店舗は、一九二九（昭和四）年九月、台南警察署から危険家屋と認定され、翌年三月までに改築または移転するよう命じられた。「酔仙閣」の所在地が、三〇（昭和五）年以降の商工録で明治町三丁目一六六番地となっているのは、この命令に従って店舗を移転したものと見てよいだろう。経営者もこの時から高大水に変わっている。やがて三二（昭和七）年に「台南銀座」が新造されると、七月「酔仙閣」はこの目抜き通りの目立つ一角に打って出た(二)。

ちなみに、一九二七（昭和二）年の商工録では、「酔仙閣」の営業税納税額は二七〇円三〇銭。これは「宝美楼」の二五二円六〇銭、「西薈芳」の二〇七円六〇銭を引き離して、「台湾料理店」の種目ではトップである。「日本料理店」を含めても、五〇一円六〇銭の鶯遷閣、三一〇円五六銭の小梅園につぐ第三位で、その規模の大きさが偲ばれる(四)。納税額の推移を見ると、三〇（昭和五）年版では二八八円、三二（昭和七）年版では二九三円と、年々右肩上がりの成長を続ける順調な経営ぶりだった。

さて、この「酔仙閣」の創業年代について、いくつかの商工録が一九二一（大正一〇）年と記載していることが、悩みの種であった。一度は春夫訪問説を示唆した稿者も、この資料の発見によって、結論を留保せざるを得なくなっ

ていたのである。ところが今回、『台湾日日新報』「地方近事（台南）」欄から、幸いにも次の記事を見出すことができた。一九二〇（大正九）年、春夫来南の約三か月後の記事である。

▲台湾軽鉄総会　台湾軽鉄株式会社にては二十七日市内永楽町三丁目醉仙閣に於て第八回定時株主総会を開き引続き正午より午餐会を催ほすと

（『台湾日日新報』一九二〇・一一・二八、四面）

また、台湾総督府図書館旧蔵書（現国立台湾図書館所管）に含まれていた大正中期の商工録（鈴木常良編『台湾商工便覧　第一版』一九一八・一〇、台湾新聞社）には、次のような記述が見える。

醉仙楼　台南市本町三丁目（電一四二）
支店　永楽町一丁目（電三七二）
店主　唐大漢

（第二編二五三頁）（五）

電話番号の三七二番から、この「醉仙楼」支店は、「醉仙閣」の前身にあたる店舗と考えて間違いはないだろう。引用中に永楽町一丁目とあるのは、けだし三丁目の誤りである。ただ、この頃の台南地図を見ると、永楽町の一丁目と三丁目が逆に記載されている例があり、一九一六（大正五）年の町名改正公布後に何らかの混乱があった可能性も否定できない。

「醉仙楼」支店誕生の経緯については、『台湾日日新報』一九一三（大正二）年の漢文欄に興味深い報道がある。

◎酒樓競爭　臺南市內酒樓。以竹仔街醉仙樓爲第一。此次又買收外宮後街花樓。改營支店。因恐同街水仙樓與之競爭顧客。竝設計向該樓厝主。加稅租借。厝主許之。遂亦歸其掌握。該樓主唐學如心甚不甘。乃與寶美樓主肅宗漢及市內紳商數名。向王麗生租出該街勝發號故址。卽在醉仙樓支店對面重新整頓。將改築三層樓。取名西薈芳目下正興工建築云。

（『台湾日日新報』一九一三・七・一七、六面）

約言すれば、市内竹仔街（のち本町三丁目）の酒楼「醉仙楼」が、外宮後街（のち永楽町三丁目）に支店を出すにあたり、同地の商売敵「水仙楼」の建物を家主との直接交渉で強引に借り上げてしまった。この処置を不服とした「水仙楼」の店主・唐学如は、同業「宝美楼」および資産家

の協力を得て、「醉仙楼」対面に新たな酒楼の開店を計画。その名を「西薈芳」とし、建物を改築して三層楼にしようとした。

人々の耳目を聳動したこの「酒楼競争」には続報がある。

◎酒樓開張　臺南市牛磨後街唐學如。前募集股資數千金。就外宮後街勝發號故址。重新建築三層樓。其初計劃木造。嗣因當局恐有危險之虞。命改砌以雁齒磚。目下工事已將告竣。不日開張酒館。取名西薈芳。現正準備一切將來與竹仔街辭(辭)仙樓及支店。當不免競攀顧客也。

（『台湾日日新報』一九一三・一一・六、六面）

◎酒館開張　臺南市牛磨後街唐學如。與本島猖(倡)寮主鄭天德、陳登榮、謝相、曾温、謝氏銀等。合資經營酒館於外宮後街。取名西薈芳。其設備經已完成擇十二日開張。聞鄭等向本島貸座敷組合。借出金一千圓。往北購買花枝。前來款客。於陪酒而外。別有所圖云

（『台湾日日新報』一九一三・一二・一四、六面）

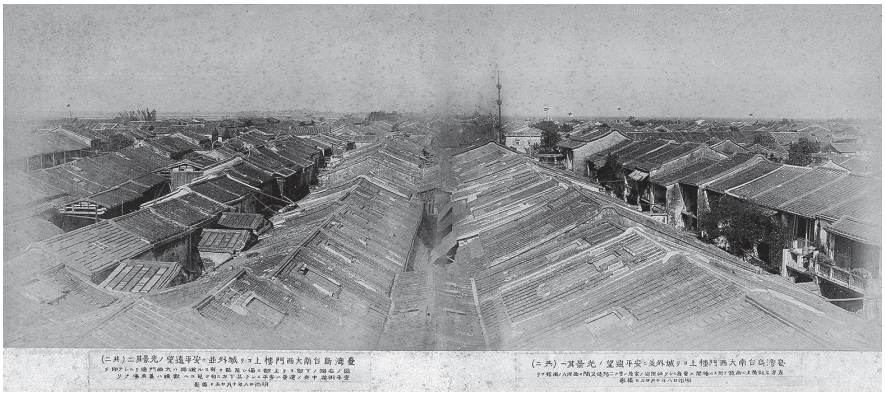
「西薈芳」は当初木造で改築する計画だったが、当局から危険性の指摘を受けて煉瓦造に変更。一九一三（大正二）年一二月一二日に開店した。経営には娼寮（台湾遊廓）が参画しており、「本島人貸座敷組合」から借金して台北の芸妓（北妓）を招いたほか、接客にも特別な趣向を凝らしていると言う。次の記事から分かるように、地元遊廓と気脈を通じた「西薈芳」は、花代を廉く抑えたことで、富貴の家の子弟達が続々と押し寄せる人気店として好調に滑り出したのである。

本来、外宮後街の独占を狙っていた「醉仙楼」の店主唐大漢が、自分の店先でライバル店が繁盛する様子を見て黙っているはずがない。

◎旗亭鬪勝　臺南市外宮後街西薈芳旗亭。經已開張矣。其陪席藝妓。與開仙宮街寶美樓。及本島人貸座敷聯絡。減收買笑資金。以故五陵年少。趨之若鶩。而同街醉仙樓支店。亦思出奇制勝。修整其門面。擴張其席次。租出隔鄰太興隆樓上兩進。鑿壁安門。聯爲一氣。大加修飾。宴會可容二十餘席。其門面亦將改張西洋式。雇二老口街湯川鹿造爲之包建。工資豫按二百數十圓現正著手。將來必有壯麗可觀。二比競爭。不知何所底止也。

（『台湾日日新報』一九一三・一二・三〇、四面）

「醉仙楼」支店は「西薈芳」の活況を見るや、その対抗手段として、隣家二階の二室を借り、内部で繋げて二十余



日本軍台南入城直後の西門外。西門上より西方を望む。中央が外宮後街、中央右寄りの旗棹が水仙宮、遠景左方が安平、遠景右方が「廠仔」附近。（陸地測量部『台湾諸景写真帖』1895.10.25 撮影、国立国会図書館蔵）

席の宴会が可能な大部屋に改造。正面玄関も西洋式に改築することで事業拡大を図った。工費予算二百数十円。請負人は「湯川組」（建設業）組頭の湯川鹿造。

このように、「酔仙楼」支店と「西薈芳」との顧客獲得競争は壮烈なもので、巷間の話題ともなっていた。その主人公・唐大漢は、清末に福州から台湾に渡り、もと鳳山県衙門の厨房に勤めていた料理人である。台湾割譲時に台南に移り、竹仔街に茶館を経営したが、のち借財して料理店（酔仙楼）を開業。利益を上げると支店（外宮後街）及び餅舗を起して事業の拡大に努めた。しかしほどなく病臥し、一九一八（大正七）年冬に死去すると、店は邱氏の手から（六）、王象へ、そして蔡才へと転売が続き、二一（大正一〇）年には経営再建が図られる（七）。が、もはや過去の栄光を取り戻すすべもなく姿を消した。

この経緯からすると、「酔仙楼」支店が本店から独立して「酔仙閣」となるのは、店主・唐大漢没後、店舗が売り出され、経営者が変わっていくさなかのことであったと考えられる。歴史ある本店は如上のように没落したが、かつての支店は人手に渡りながらも生き残り、「西薈芳」「宝美楼」とともにモダン台南の一シーンを演出する巨大料理店へと成長していった。

「酔仙楼」支店の招牌（かんばん）がいつ「酔仙閣」に掛け替えられたのか、厳密なところはまだ分かっていない。一九一九（大正八）年の商工録で旧名を保っているところからすると（ただし、前年没した唐大漢の名も見えるから、一八〈大正七〉年の第一版の流用かも知れない）（八）、改名は同年中か二〇（大正九）年のことと見てよい。佐藤春夫が陳聰楷に連れられて置酒した旗亭に「酔仙

閣」の招牌がかかっていたとすれば、それは独立経営になってから間もない、かつての「酔仙楼」支店だったことになる。「西薈芳」との競争過程で玄関は豪華な西洋風に改造されたものの、建物自体は旧時代の花館・商店の再利用であり、「玉葉仔（ゲフュア）」をはじめとする歌妓たちの絃歌のなかに、繁栄したかつての港町の幻影を呼び覚ますこともできただろう。

この店があった永楽町三丁目（旧外宮後街）は、「禿頭港（クッタウカン）」の幽霊屋敷に擬せられた造船廠「廠仔（チョンア）」（入船町二丁目・旧新港埠街）の跡から市内に戻る道筋にあたる。「女誡扇綺譚」のさりげない場面転換は、現実の台南における地理関係に忠実に対応するものだったのである。

台北音楽会のこと
――春夫の飛び入り講演

台北滞在時の生活については、これも「奇談」（『女性』一九二八・一、のち「日章旗の下に」と改題）からわずかにその片鱗が窺われる程度で、詳しい状況は春夫の著作には現れてこない。ところが、春夫滞在中の『台湾日日新報』紙面に次のような足跡が残されていた。一九二〇（大正九）年一〇月二日、春夫は鉄道ホテルで催された音楽会に参加し、それどころか即席の講演まで行っていたと言うのである。

●南方芸術社の音楽会

▽一昨夜鉄道ホテルにて立錐の地なき盛況

南方芸術社が機関雑誌『南方芸術』の創刊披露を兼ね、同社の事業たる趣味向上の鼓吹の為、同社主催の下に一昨夜午後七時半より鉄道ホテルに於て音楽会を催したるが久方振の音楽会のことゝて頗る盛会満場立錐の地なきほどの大入であつた、緒方武蔵君の開会辞に始まり予定の番組を終へ武井雪三君の閉会辞で午後十時半頃散会した尚番組以外に最近来台した佐藤春夫君も壇に立ち一場の講演を試みられたのは実に意外の収穫であつた巧妙なる音楽に酔つた聴衆は一曲終る毎に急霰の拍手を惜まず静かな初秋の夜をかくして歓楽の清趣に更かしたことに満足して三々五々家路に急いだ

（『台湾日日新報』一九二〇・一〇・四、五面。傍点河野）

ちなみにこの音楽会のプログラムは、数日前の同紙に次のように報じられている。長くなるが、一つの資料として全文を引用する。

●南方芸術社の音楽会

▽十月二日午後六時より鉄道ホテルに於て

最近当地に生れたる南方芸術社は文芸雑誌『南国(方)芸術』と称する百五十頁の雑誌を隔月に発行することになりこの創刊号は本月発行する由なるが同社は尚芸術的趣味の向上を図る為め音楽会其他趣味の会合を時々催すことゝし第一著として明二日午後六時より左記の番組にて音楽会を開催するに付同好者は奮つて来聴されたしとの事なり／□三部合唱　下村千里氏、(イ)秋の哀(ラマン)　菅沼三郎氏、(ロ)雷雨行（英国民謡）速水和彦氏／□ピアノ聯弾　玉崎かつ子嬢(イ)インターメゾルーゼ（フランク作）玉崎はる子嬢、(ロ)トラヴアトーア中のアンヴイルコーラス（ヴアーデー作）／□マンドリン合奏（第一マンドリン）渡辺浩、(イ)エルミヤ（マズルカ）安東正五氏、(ロ)老爺の思ひ出（ミヌエット）（第二マンドリン）菅沼三郎氏、中村博氏、下村千里氏（ピアノ）小出研一氏／□ピアノ独奏　岡村つね子嬢、ソナチーネ（クレメンチー作）／□ヴアイオリン独奏　張福興氏、(イ)シンプルアヴユー（トーマス作）(ロ)メロデーインエフ（リービンシユタイン作）／□二部合唱　下村千里氏、ライフドリームイズオアイ速水和彦氏／□ピアノ独奏　玉崎はる子嬢、フラワーソング（ランケ作）／□ピアノ、ヴアイオリン、マンドリン、ホタ合奏　館野みち子嬢岡本光枝夫人、浅原静枝嬢、山田静枝嬢、横毛梅子嬢、神谷花子夫人、神谷鋭太郎氏、(イ)越後獅子(ロ)ジヤパニーズドール／□講演　一条慎三郎氏、音楽に就て（約卅分）／□ヴアイオリン独奏　李明家氏、(イ)ベルソース（ゴダード作）(ロ)ロンド（ステイベル作）／□オーガン独奏　久木田夫人(イ)夢想の曲（シユーマン作）(ロ)シシリアノ（バーゴレン作）／□男声独唱　速水知(和)彦氏、バイデングレナテイア（シユウマン作）／□ヴアイオリン独奏　赤尾寅吉氏／□上低音読唱　ガム氏、アブセント（メトカーフ作）／□ピアノ独奏　ガム夫人、ヴオルストリステ（ジベリユース作）／□マンドリン合奏　ソグノロゼオ（ポルカ）／第一マンドリン　渡辺浩氏、安東正五氏、菅沼三郎氏／第二マンドリン　中村博氏、下村千里氏／　ピアノ　小出研一氏／他に台北音楽家連で今度初めて出来た演奏者二十二氏の管絃楽『カルカツタ』をも上演する因に入場希望者は左記の人々に申込れたし／　緒方武蔵（駅伝社）速水和彦、白男川敬蔵（鉄道部）武井雪三（主計課）井手俊次郎（医院）秋沢烏川（法務部）西口紫溟（台湾新聞）西岡塘翠（台銀）

（『台湾日日新報』一九二〇・一〇・二、四面）

ここで気になるのは、音楽会の世話人として台湾新聞社の西口紫溟の名が見えていることである。西口紫溟は本名進卿。一九一八（大正七）年四月、台湾新聞社台北支局編集局に入社。二二（大正一一）年四月、門司新聞編集長として招かれるまで、台湾新聞新歌壇の選者として活躍している。文芸雑誌『人形』（一八・六創刊）、『南方芸術』（二〇・一〇創刊）の編集に携わり、台湾時代には歴史物語『南国物語』（二〇・二、人形社）、歌集『南の国の歌』（二〇・八、人形社）の著書がある。内地帰還後はプラトン社の雑誌『苦楽』編集長や郷土雑誌『博多余情』の出版社長を務めた人物である。

この西口紫溟は、後年「佐藤春夫との交遊」と題する文章のなかで、春夫の台湾旅行に触れている。〈大正九年の六月、私は佐藤春夫と共に東勢角から蕃山に入った。阿里山へも行った。同行一ヶ月、タイヤル、ブヌン、アミ族などの住む山々を踏破し、台南、高雄、そして我鸞鼻まで行を共にした〉〈高雄の尼寺で泊った〉〈彼から懇望されて、基隆から支那福建省まで案内させられた〉〈特に「女誡扇綺譚」は、私が彼を台南へ案内して、アンピンやゼイランジャ城につれて行った時のことが詳しく書かれていて、あの中に彼の友人苦（若）き世外民として登場するのは私のことである〉（九）などの回想は、事実と相違する部分が多くそのまま鵜呑みにはできない。だが、一九二〇（大正九）年当時台湾総督府総務長官の任にあり、同郷和歌山の出身者として春夫の旅行に庇護を与えた下村宏（号・海南）は、西口の歌人仲間として彼の著書『南国物語』に序文を寄せているし、春夫の厦門旅行が台湾新聞から原稿料を前借りして実行されたことも分かっている（一〇）。このことからすると、西口の回想は全く根拠がないものとして一蹴し去ることはできない。少なくとも春夫は、一〇月二日の夜、鉄道ホテルで西口と顔を合わせていたことは間違いないだろう。この音楽会も、厦門旅行の件で台湾新聞社に借りを持つ春夫が、西口から誘われたので出かけ、また西口の要請があったので講演を行ったと見るのが自然ではないだろうか。

ところで、飛び入り参加で行った春夫の講演とはいかなる内容のものだったのだろうか。一九年後、この音楽会の一夜のことを記憶していた宮崎震作という人物が、『台湾日日新報』紙上に次のような投稿をしており、九〇年以上経った今となってはとりわけ貴重な当夜の消息を伝えてくれている。

はがき随筆　佐藤春夫と南方芸術

大正九年頃だつたと思ふ。『南方芸術』と云ふ同人雑

誌が台北で発行されて、その記念講演会のやうなものが鉄道ホテルで開かれた。同人の顔ぶれは忘れてしまつたが、西口紫溟と云ふ人は確かに其一人だつた。それから速水和彦さんが何か独唱をやられたやうに思ふ。佐藤春夫の講演のあつたのも、多分その時のことである。当時十九の少年だつた僕は、素より武者小路実篤の崇拝者で、佐藤春夫は余り好きでなかつた。然し渡台後間もないに余りにも乾燥無味な台北の空気に早くも厭気のさしてゐた僕には、佐藤春夫が来たと云ふ事は確かに嬉しいことではあつた。どんな講演だつたか全然記憶にないが、ただ一つ、自分は時々世の中がいやになるが、その時はぢき逃げ出して旅をすることにしてゐる……云々と云ふ言葉と、それから佐藤さんがさう云つた時に僕の前にゐた男が無遠慮に笑ひ出した事だけを憶えてゐる。

中研　宮崎震作

（『台湾日日新報』一九三九・五・二六、六面。傍点河野）

数え年二十九の佐藤春夫が東熙市に連れられて台湾にやってきたのは、家庭生活の不和と、畏友・谷崎潤一郎の妻・千代に対する禁断の思いを持てあましての逃避行の意味があった。ここに引いた一聴衆の証言は、放浪紀行のつもりで台湾を旅していた春夫の当時の憂悶をよく伝えているように思われる。春夫の発言を軽妙な冗談と思って笑い出した男に対し、十九歳の少年は〈無遠慮〉なものを感じ取った。春夫の声音のうちに籠る深刻な翳りを読み取ったからこそ、それからさらに十九年の月日を経ても忘れ得ぬ記憶として、この一場の光景が宮崎の脳裡に蘇ってきたのではあるまいか。

佐藤春夫と西口紫溟、また台湾新聞社との関係については、今後も引き続き追尋して行きたいと考えている。

註

一　拙稿「佐藤春夫「女誡扇綺譚」と港の記憶 ――再説・禿頭港と酔仙閣――」（『実践女子大学文芸資料研究所年報』二〇一三・三）を参照されたい。

二　真杉静枝『南方紀行』（一九四一・六、昭和書房、一五六～六一頁）。

三　商工録の記述の詳細については、註一を参照されたい。以下、「酔仙閣」の店舗情報に関して特に註記のないものも同様。

四　栗田政治編『昭和二年台湾商工名録』（一九二七・八、台湾物産協会、一〇八～二頁）。

五　鈴木常良編『台湾商工便覧　第二版』（一九一九・一一、台湾新聞社、第四編三一三頁）にも、全く同様の記載が

ある。

六　「雪白梅香」欄（『台湾日日新報』一九一八・一二・六、六面）及び「來函照掲」欄（『台湾日日新報』一九一八・一二・二八、六面）の各投稿文による。

七　「酔仙楼維持声価」（『台南新報』一九二一・六・一一、六面）。

八　註五参照。

九　『五月廿五日の紋白蝶』一九六七・一〇、博多余情社、一八九頁）。

一〇　一九二〇年七月一一日付佐藤豊太郎宛て春夫書簡による（『定本佐藤春夫全集』第三六巻、二〇〇一・六、臨川書店、三七～八頁）。

付記

調査中、貴重な御助言を賜りました黄天横先生、註四資料と西口紫溟の周辺資料につき御教示下さった河原功先生、図版掲載をお認め下さった国立国会図書館に篤く御礼申し上げます。

なお、本研究は、ＪＳＰＳ科研費 22720078 の助成を受けたものです。

（こうの　たつや・実践女子大学准教授）